

統合失調症に特化し強みを發揮 地域力も活用し社会復帰を促す

医療法人社団助会吉祥寺病院は、JR三鷹駅と京王線調布駅のほぼ中間にある精神科専門病院である。開設は1954年で、早くから患者の社会復帰を目指した医療を提供してきた。近年は統合失調症に特化し、2004年完成の新病棟はアメニティを充実して患者満足度を高めるなど、「選ばれる病院づくり」に取り組んでいる。



吉祥寺病院は、1964年に精神科作業療法を開始、その翌年には患者家族会を結成するなど、他病院に先駆けて、「患者さんと家族の側に立ち、社会復帰を目指す医療」に注力してきた。その姿勢は今も変わらない。

1999年に現院長の塚本一(はじめ)氏が就任してからは統合失調症に特化し、入院患者の約86%をこの疾患が占める。一般に、統合失調症の患者割合が高い病院では入院が長期化する傾向がある。2005年の厚生労働省患者調査では、統合失調症の平均在院日数は600日を超えるが、吉祥寺病院の平均在院日数は200日を切る。

「“統合失調症に強い病院”としてパフォーマンスの高い医療を行っているという自負があります」と塚本院長は胸

を張る。入院患者の約6割が、近隣の大学病院や50以上のクリニックなどの紹介によるもので、「統合失調症に強い病院」として他の医療機関に浸透していることが伺える。

また、この地域の特性をうまく活用して「持たざる経営」を実現している。周囲にCTやMRなど検査機器の設備が充実している医療機関が多いため、身体合併症の診療機能はあえて持たず、病病連携や病診連携で対応しているのは、“賢い選択”といえるかもしれない。

家族も診る病院として 3つの手厚い家族支援

「この病院は、医師も看護師もみんなが、患者だけでなく家族の方も向いてくれたので、とてもありがたい」と、

家族に言われると院長は言う。

「統合失調症は、ご家族の患者さんへの接し方で再発率が大きく変わります。ですが、この病気のことを知らず、どう対応すればよいかわからなくて戸惑っているご家族が多い。家族がきちんと患者さんに向き合えるようになれば、再発率を抑えられる。だからこそ、家族支援は非常に大切なのです」

吉祥寺病院では、毎月第3土曜日に開かれる「家族会」の他に、2003年度からは「家族教室」と「ファミリーサポートセミナー」が開始され、それぞれ3つの手厚い家族支援が特色だ。

勉強会形式の「家族教室」は、医師と薬剤師、精神保健福祉士(PSW)が統合失調症についてレクチャーする。この症状で入院した患者の家族には必



「精神科病院の役割は、地域で生活している患者さんが再発しないように、困ったときにしっかりと支えることです」と語る塚本院長



2004年に完成した新病棟。その南側にある中庭には季節の花が咲き、心和む空間になっている。



患者や家族の側に立った医療が行われている。グループワーク(左上)、ファミリーサポートセミナー講義(右上)、家族会(左下)、アフターミーティング(右下)。

ず案内を出して参加を促す。年3回開催で一般にも公開されている。

「ファミリーサポートセミナー」は完全指名制で家族を対象に心理教育を行っている。患者との距離がうまく取れないなど心理的な負担が大きい家族に声を掛ける。毎月1回、全8回のこのセミナーは、講義とグループワーク(1グループ6~8名)を行う。参加家族20名に対し、多職種のスタッフ13名がきめ細かくサポートする。参加した家族の感想を聞くと、「同じ患者を持つ方々と話ができる気持ちがほぐれた」「気持ちにゆとりが持てるようになり、向き合えるようになった」と非常に好評で、塚本院長も手応えを感じている。

生活技能訓練による現場体験で退院後の生活をイメージ

統合失調症は100人に2~3人が発症するとされ、決して希な疾患ではない。近年では治療薬の進歩により軽症化しており、昔のように長期入院が必要な患者は少なくなっている。「患者さんを治して自宅に帰す、本来の病院機能に徹したい」と塚本院長。

吉祥寺病院では円滑な社会復帰を目指して、作業療法士(OT)11名やPSW2名、看護師2名などで構成され

る社会療法部が中心になってリハビリに取り組んでいる。デイケアは実行委員会方式を採用しているのが特徴。患者が自分たちで運営することで、自己決定力や実行力がついてくる。スタッフは毎週全メンバーに面接し、個人的な課題の達成状況などを確認して支えている。

「生活技能訓練(SST)」で特に実践的なのが、長期入院患者を対象にした「チャレンジグループ」のセッションだ。退院後の生活がイメージできるように、吉祥寺病院を退院した方に現在の暮らしぶりを話してもらったり、実際に作業所やグループホームを見学する。ゴミの分別や出し方は自治体によって異なるが、ルールの違いも現場で体験する。先日、30年近く入院していた患者さんがこのプログラムに参加して退院したと、塚本院長は嬉しそうに語る。

同院に長期入院し、退院した患者100名程度がこのエリアで生活しているという。安心して退院できるのは、退院後の患者支援が手厚いことが大きい。この周辺には作業所やグループホームが10数カ所あり、施設との連絡も緊密だ。グループホームを建てた家主もいるというのは、吉祥寺病院の取り組みが地域住民に理解されている証といえるだろう。

多職種連携のチーム力で高いパフォーマンスを目指す

今後の医療は様々な職種の協力が不可欠だ。吉祥寺病院では全職員相互の力を発揮するため、多職種によるカンファレンスを積極的に行っており、時には患者本人や家族にも加わってもらう。患者の相談役として、医師と患者の緩衝役として活躍しているのがPSWだ。8名のPSWを各病棟に配置し、入院時の面接から担当する。PSWが対応した相談件数は、日本医療機能評価機構受診病院の平均の20倍と非常に多い。

「今後は統合失調症の専門病院として、より一層の発展を目指す」と語る塚本院長。「入院患者を積極的に受け入れる一方、在宅復帰を意識して、退院後は訪問部隊で患者さんを支えられるシステムをつくりたい」と結んだ。

医療法人社団助効会 吉祥寺病院

【所在地】東京都調布市
【開設】昭和29年
【病床数】345床
【関連施設】介護老人保健施設、クリニック、調布市地域包括支援センター、指定居宅介護支援センター、指定ホームヘルプサービスセンター